
占夢者人の夢 ～参ノ巻～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢　～参ノ巻～

【Nコード】

N8283D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

突如、塚原叶に掛かってきた電話。それは、祖父良園の危篤の知らせであった。悩む末、大阪に戻る叶。そして、その間に錦織神楽が病院から消える。帰省した先に残された良園の遺言書。そこには、塚原家に伝わる預言が記されていた。陰陽道と、占夢者の朔夜のこれから先の未来のこと。そして、五行を司る陰陽師を捜すため舞台は、一先ず沖縄と繋がっていくのであった。

#1 プロローグ

色は匂へど 散りぬるを

我が世誰ぞ 常ならむ

有為の奥山 今日超えて

浅き夢見じ 酔ひもせず

これはかの有名な『いろは歌』である。しかしこれは、夢は虚しい現世の象徴として歌われている。そして、伝統的ないろはガルタの『ゑひもせず』の次、つまり最後が『京』になっており、これを『ん』の代用に見立てている。この『京』の札の文言が『京の夢、大坂の夢』である。『京』は上京の終着点と言う意味もあるのだから。そして『大坂』とは『大阪』の明治以前の書き方である。

それから記録を辿って行くと『京の夢、大坂の夢』に、過去、夢を他人に話す場合、まず唱えてから話す事があったそうだった。魔除けかまじないか？今となってはその本来の意味はカルタからも消えかきりまるで夢のような話でもあるそうだった。

#2 帰省

帰省

一生大阪の自らの実家に帰る事はないとそう考えてきた。今さら帰る事など出来はしないし、帰りたくも無い。自ら選んだ事であった。しかし、その考えを打ち砕く出来事が起こったのである。

夏の事故からリハビリを終えて、秋から冬に季節が移り変わるそんな時期であった。朝早く、携帯電話の着信音が叶の耳に鳴り響いたのである。その着信を見てみると、中学から大学までお世話になった伯母からのものであった。

「朝早くからごめんなさい。どうしても話さないといけない事があったものだから！」

久しぶりに聴いた伯母の声であったが、いつになく慌てた口調で云い放った。

「どないしたん？……慌てんで話てや？……」

まだ覚醒しきれてない頭を何とかはつきりさせようと大きく首を回した。

「叶ちゃん。今直ぐ大阪に戻りなさい。昨夜からお爺さんの良園さんが昏睡状態に入ってるの。何やら叶ちゃんに伝えたい事があるみたいで、うわごとの様にしきりに呟いているそうよ……逢って来なさい。話では、もう長くはないらしいわ！」

「なんやて？じいちゃんが危篤なん？」

醒め切らぬ頭がこの言葉でハッキリと覚醒した。あの元気で、死にそうにもなかった祖父の最期を見届けることは、いくら大阪に戻りたくなくてもこれだけはやはり断ることは出来ない。

「叶ちゃんが戻りたくなくても、やはり一度大阪に足を運びなさい。あなたはやはり、塚原家の跡取りなんだから」

塚原家の跡取りというのは頭を悩ませる事ではあるが、やはり、

身内の一大事に顔を出さなければならぬだろう……しかも、何を思っただか叶に話したい事があるとなれば、見過ごす事は叶の性格上出来はしないのだから。

「連絡おおきに。判ったわ。間に合うかどうか分からんけど、昼にでも新幹線の切符とって行くわ……」

その言葉に安心したのか、

「そう、あれだけ大阪には帰らないと云っていたのに決心してくれたのね……私も用意が出来れば向うから、先に行ってちょうだい。それでは、当地で……」

用件だけ云った伯母は速やかに電話を切った。よほど慌てているらしい。

「こんな日が来るやなんて……」

叶はベットから起き上がり、速やかに準備を始めたのである。

「そう云う訳やから、俺、大阪に一時行ってくるわ……バイトの方も連絡とれたし……」

起きぬけの朔夜に簡単な説明をして、叶は必要な大きな荷物を抱えていた。

「そうですか、分かりましたよ。気を付けて行ってくるのですよ」

朔夜は話を飲み込み真面目な顔をして答えた。

「間に合うと良いですね？」

東京と、大阪を結ぶ距離は遠い。昨今ではそこまで時間がかかる訳ではないが、今回もし祖父に万が一の事があつたら身内として心残りである。それを朔夜は意識した。

「もし何かあれば、携帯に連絡せえや。雅樹のこともあるし、問題が起これないとは限らんのやから」

「ええ、その時に連絡しますよ。あ、早く行つてきなさい」

時間の余裕はない、朔夜はそう判断したのか、叶を後押しする。

「じゃあ、後の事はよろしゅうな！」

急いで玄関に向くと、叶は勢い良くドアを閉めたのである。

大阪への新幹線は、中学生の修学旅行以来乗った事はなかったが、東京駅でチケットを早速購入し、早々と乗り込んだ。飛行機という手もありはしたが、戻るのならあの頃の自分を思い返したいとそう願った為、いち早く新幹線に乗り込んだ。発車した列車の窓際から見えるその景色を見ると、あの頃とは変わっていた。何故だかそれが奇妙に思え、あの当時の事を思い出していた。

逃げるように出て行ったあの実家。今ではどうなっているのか？長い年月を経て、叶は色々と思い巡らしてみる。しかし、見納めだと思っていた泉神社の鳥居と、その奥に立っている大きな御神木の断片だけが頭を過るだけであとは思い出せなかった。

「母さん怒るやろか？」

実家を飛び出した時、家のお金を拝借した事を思い出す。しかも書き置きさえしなかった。親不孝も度が過ぎている。しかし、あの時はもう精神的に切刻詰まっていた。どうしても家を出たかった。押し寄せてくる自らの罪悪感。でも伯母夫婦と過ごしている間は楽しかった。プレッシャーと、居心地の悪さがそこには存在しなかったからである。

時間はあっという間に過ぎて行き、目的の場所に辿り着いた時はもう思い巡らせる事はなく覚悟は決まっていた。怒られようが非難されようがどうでも良くなっていたからである。

新幹線から下りた先は、あの頃とは別世界になっていた。もちろん、何となくイメージは残っているものの、十年も経てば当り前なのだが、叶は面喰らりた。どっちに行けば良いのかさえ見当が付かなかったのである。しかし、下りた先の交番で道を尋ね何とか自ら向うべき場所を把握すると急いでタクシーを拾った。そんなタクシーの中、以前朔夜から聞かれた事を思い返した。何故、いつまでも大阪弁を使うのか？

普通考えてみると、慣れ親しんだ土地の言葉に慣れるもので、こ

ういうケースは珍しい。朔夜はそれを察したのだろう。その辺を聞きたかったらしい。しかし、敢えて叶は大阪弁を貫き通したかった。心のどこかで、故郷と云うものへの憧れがそうさせていたのかも知れない。

そして、変わり果てた町並みを眺めながら、一時間かけて目的の実家に戻る事が出来たのである。

#3 予言書

予言書

鳥居を抜け、自らの家の玄関に入り込んだ叶は、躊躇いはしたが、物音もしない屋敷の敷居を跨いだ。

「ただ今戻ったわ……」

まず初めにどう云い出すか考えていたが、ありふれた言葉しか出なかった。

そして、敷居を跨ぐと、何故かしら記憶が戻った。あの頃と全く変わらない匂いがする。問取りも改築した様子もなく当時のままの様であった。その事に何かしら不思議と安堵を感じた。

奥からパタパタというスリッパの音が聞こえてくる。年は老いたにせよ、出迎えた母親の無表情な顔を見て一瞬鼓動が高鳴った。

「……おかえりや……」

返って来る言葉は云っている意味から察すればイマイチ感情が籠っていない。他人行儀な一つ間をとったセリフである。それからそれ以上、母親は一言も口を開かず、祖父の寝室へと目配せをしながら導いた。

全く親子とは思えない接し方である。

期待していた訳ではないが、こんなにも突き放されると寂しい気持ちになった。自分で作った溝を埋めれる訳はない。分かっているのに気持ちは沈んで行くばかりだった。

しかし、昏睡状態なのに何故病院で看護してもらっていないのか？その訳は祖父の寝室に行つて分かった。集められた親戚一同の会話を聞き、どうやら、在宅介護を祖父は望んでいたらしいのである。その主治医らしき者が祖父の脈を測っていた。そして、点滴と薬で何とか繋ぎ止めているらしい事が分かった。

「今は意識あるん？」

ボソリと床の間で隣に座っている父親に問いかけた。

「親不孝者の叶か……お前に逢う機会を作るとは思つたらなんだが、親父が望んだ事やからな……意識は朦朧としてはいるがお前に逢いたがつとるわ……」

まるで、死人が横たわっているかのような青白い顔が叶の胸を締め付けた。しかし、祖父は叶の声を聴くなり、安堵したかのように薄っすらと笑いかけて来た。

「おお、叶か……大きくなりおつたなあ」

途切れ途切れ、息を吐きながら言葉を発する。

「突然家飛び出して悪かったわ……じいちゃんには一言云つて出れば良かったなあ」

軽い挨拶。一番初めに叶の力に気が付いた祖父良園ではあったが、両親より身近な存在でもあった。修行は苦しかったし、厳しい忠告をしてくれた事は今の叶の土台を作り上げた大切な存在でもある。

「どないしても叶に……読んでもらいたい物があるんや……」

「読んで欲しい物つて何や？」

そう問い返す叶に、床の間の机の上にある本の山を震える手で指し示した。

「その本の中……の一番上に積み重なっておる一冊や……それを見れば、儂が云いたい事が分かるやろつて……」

早速立ち上がり、叶はその一番上に置かれていたという黄ばんだ所々破れている古めかしい本を手にとった。

「これ……なんか？」

その表紙には何も記されていない。ただの紙の束のように感じられた。

「それを読むんや叶……塚原家に伝わる偉大なる……陰陽師が……書き記した過去の……そしてこれから先の事や……」

「これから先の事？それつて予言書みたいなもんかいな？」

ページをめくってみる。読み取る事が困難な、達筆な筆で書かれた行書の文字を目で追った。

「すまん……将司……この場は叶と二人にしてもらえんやるか？」
人払いをしたいと良園は、父に申し出る。その言葉を受け取り、
親戚一同速やかに席を立ち始めた。そして、願い通り叶と良園は二
人きりになる。

「お主には読めんやろう思うて……別に書き出した物がここにある
……お主が出て行った後に倉の中で発見した書物を解読したんや……」

ゆつくり身を起こすと、布団の下に隠すように敷いていた紙の束
を叶に手渡す。

「それを読んで……これから先の身の振り方を考えるんやな……大
切な事やからのぉ……所で、教えておいた事は……実行しとるんや
るな？」

苦し気に、再び身を布団に沈める。

「叩きこまれとった事。正しい出生の日時や、場所。逆風の対処法
は誰にも教えとらんわ……陰陽師として産まれた者の基本やからな
……」

本当は、叶の誕生日は八月ではない。朔夜やかえでに教えている
事のだけが本当の事であろうか？ 誰にも教えてはいけない。知
っているのは塚原家のみであった。それだけ陰陽師としての身の振
り方は虚しい。

「相変わらず夢を見る事はないのやな？」

「無いわ……」

「やはりな……お主はどうやら……過酷な星の下に産まれてきたの
かもしれへんなあ……この塚原家を恨むか？」

「恨むやなんて……そんな今さら云われてもどないする事もでけ
へんやる？ ただ俺はここにもう存在するんやから……」

「そうか……それを聞いて安心したわ……それだけが気掛かりやつ
たからなあ……クッ。」

叶の言葉を聞いて安堵したのか、突然良園の心臓に鈍い痛みが走

った。身をクの字に曲げ、うめき声をあげ始める。それを見て、叶は慌てて部屋をとび出し、主治医を呼びに行ったのである。

しかし、主治医を呼びに行つて歸つて来た時には、良園は還らぬ人となつていた。苦しい闘病生活を知らない叶にとっては、呆気無さ過ぎて言素を発する事が出来なかった。

主治医は腕にはめている時計を確認し、冷静に御臨終の言葉を發した。周りの者達からの嗚咽が耳に届いた時初めてジワジワと実感がわいた。

「じいちゃん……」

少なくとも心が泣いている自分がそこにいる事に初めて気が付いたのである。

実家が神社であることが幸いし、通夜や葬儀は事なく行われて行った。臨終の際に間に合わなかった伯母と伯父もその席に参加した。そして、一族の席は設けられた。

「お久しぶりですね。加奈子……」

加奈子は母の名前である。

「十年の年月が経つのやなあ……お礼も無しに叶を育ててくれておきに。これは、叶の養育費に当てるはずやった物です。受け取つて下さいましな」

分厚い紙袋を伯母の前に差し出す。しかし、それを伯母は受け取らなかった。

「それなら、叶ちゃんが働いて返してくれてるから結構よ。それより、自分がどう叶ちゃんと接して来たか？その過程を見直した方が良いわ……」

叶を疎んで母親らしい事をしてきていない加奈子に引導を渡した。伯母はそれが、加奈子の為であるとそう思っているらしい。

「……産んじゃあかんかったのよ。あの子は……それだけが、私の罪やわ……陰陽師やなんて、どうして幸せにできるていうのや？私

は普通の子が欲しかった。どれだけ望んどったって、変わり様がな
い事実やけど……」

そのやりとりを影で見ていた叶は絶望していた。心の中で産んで
いけない子だとそう思っていたのかと……自分の存在価値が消え失
せそうで、眩暈がした。

でも、自分の居場所はまだ自力で手に入れた。東京にはそれがあ
る。そう思う事で何とか持ち直した。そしてその弁護に立つ伯母は、
「東京での叶ちゃんは、加奈子には判からない一面を見せてくれた
わ。それを見抜けなかったあなたがいけなかったと後悔しなさい。
一番可愛い時期を愛情無しに育てたのだから。と云っても、今とな
ってはもう遅い事ですけどね……」

それだけ云うと、もう云い残す事は無いと影で見聞きしていた叶
の肩を叩いて席を外した。

「叶ちゃん？私はこれで失礼するわ。まだこっちにいます？」

伯母は廊下でその事を問いかけてきた。

「ああ、そうするわ。じいちゃんの書物読まなあかんし……自分自
身ちよつと勉強しときたい事もあるしなあ」

その言葉に、

「そう。分かったわ……それと、叶ちゃん？もう仕送りは良いのよ。
あなたは私達の子供として育てたつもりだから。心配りありがとう。
やはりあなたは私の自慢の息子だわ。困った事があつたら何でも相
談しなさい。いつでも待っているから……それじゃ先に失礼するわ
ね？」

帰りの切符を手に入れているのか、伯母は伯父と共に速やかに泉
神社を後にした。

叶は、伯母の言葉で心が安らいだ。今まで自分を本当の息子同様
扱ってくれていた事が判ったのだから……しかし、恩返しはしたい。
せめて、養育費に掛かったお金だけは戻したい。大学生の頃からバ
イトバイトで稼いだお金は貯金するか、仕送りに使うかその二つで

生活は成り立っている。その事を知っているからこそ、朔夜は叶を居候の身として受け入れてくれた。有り難い話である。今自分がどれだけ幸せか？当の本人は余り感じないものだが、この時初めて恵まれているとそう確信が持てたような気がする。全ての事に感謝したいそんな気持ちが叶の心に広がって行った。

#4 陰陽五行の敵

陰陽五行の敵

親戚が去って行った後叶は、自ら滞在する為の部屋をあてがってもらった。居心地が悪過ぎたので、取り敢えず、離れの一室を借り切った。でも良園の初七日が過ぎるまでは大阪にいるつもりである。それに、良園の残してくれた物を読まなければならないと云う事もあった。

乱れた文字は、その時の良園の体調に依るものだろう。そう察すると、何故だかいたたまれない気持ちになる。でも、そうまでして書き残しておきたいものを無下には出来ない。そう思い、静かに読むことだけに専念した。

それには次のような事が記されていた。

『夢見ぬ陰陽師が現れる時、それを援助する者現れる。その者、東の地にて逢いまみえ、その者と共に世に蔓延る五行の者と敵対す。それは山城の国を揺るがす事となる。五行とは、宇宙を支配する五つの元素。（木・火・土・金・水）その者集いし時、破滅免れぬこととなる。それを阻止すべく立ち上がり、各地を彷徨う。北の島。陸奥の国、武蔵の国、安芸の国、南最果ての島。その者達の出生の土地を』

「五行？」

そう云えば、雅樹は木の元素を操る陰陽師。その言葉を思い返していた。武蔵と云えば今の東京に位置する。と云う事は、北の島、陸奥、安芸、南の最果ての島。にその元素を操る陰陽師が隠れ住んでいる事となる。叶は、啞然とした。自分の知らない所で何かが起こり始めようとしている。

そして、続きを読む。その後に記されている、良園のメモ書きを。

北の島。陸奥。安芸。南の最果ての島は、順に今の都道府県を当てはめると、北の島が、北海道。陸奥が、青森、岩手、宮城、福島、武蔵が、東京。安芸が、広島。最果ての島が、沖縄に位置することになる。

叶の空っぱの頭を考えてか、それぞれを書き出していた。調べる手間を考えると有り難い事である。そして、この書物は、『八世紀から九世紀頃』に書き記された物であるらしい。

しかし、この曖昧な広い土地を記されても、どうやって見つけ出せと云うのであろう？それに関する事に良園は全く触れてはいない。だけど、見つけ出してどうすれば良い？五行を司る者達が揃うのを阻止するだけで良いのだろうか？逆に味方に付けると云う手を考えてみるが、雅樹の『運命の輪は回り始めている』と云う台詞を思い返すと、既に見つけ出しているかも知れない。

少なくとも既に分かっている事。一人は敵なのである。

あと四人……

そして、二枚目の束を読みはじめる。

「五行集う時、夢見ぬ陰陽師、逢いまみえた東の者の助け舟の手により無き夢を手に入れる事となる。その力は莫大な力を秘め、夢の世界を喰い尽くす事になるであらう。それを阻止するのは、巫女なる者。その者力を温存し、夢見ぬ陰陽師と相對することとなるであらう」

何の事だか分からなかった。まず先ほどからある東の地にて出逢ったのは紛れも無く朔夜である事は分かる。しかし、巫女とは？それに、夢の世界を喰い尽くす？自分が一般的に知っている『獺』になるというその予言は本当なのであろうか？いや、考えられない……一体どうやって？

夢を知らずに生きて来た叶にとっては、謎に満ちあふれていた。

そして、これは朔夜にも関係する事だと思った為、いち早く知らせねばならない。それが、一番の解決策なのでは無いであろうか？
全ては千年以上前から記されている。その後味の悪さは一言では言い尽くしがたい。そこで占夢者としての朔夜の意見を聞きたいと思う思い始めた。

そして、五行の相克と相生についての事が書き記された三枚目の紙を見る。一時期その事を習った覚えはあるが、もう記憶には無かった。あの頃は簡単な厄よけだけを目的とした仕事しかなかったからである。

相生とは木 火 土 金 水 水を生ずる。相克とは木対土。土対水。水対火。火対金。金対木に勝つ。

と云う自然の流れと、相反する物から成り立つ。と云う事である。それを良園は分かりやすく略図で記していた。確か、雅樹は木を相生とそう云い放った。つまり、水を使った攻撃は相手を有利に立たせるのだとそう悟った。ならば、それに相反する必要な五元素は、金か土と云う事になる。その人物に何とか出逢い、味方に付けなければならぬであろう。しかし今雑樹は、何処を彷徨っているのであらうか？もしかしたらもう手後れ？叶の心には焦りが生まれていた。ここでこうして良いのであろうか？時間が叶の胸を切り刻んでゆく。

そして、最期に長く書き記された紙の束を読む事になる。

そこには、塚原家に伝えられてきたのであろう秘伝の陰陽術の一式と、良園の遺書が残されていた。

取り敢えず、陰陽術一式は後回しにして、遺言を先に読む事にした。

「もし、僕の最期の言葉に間に合った場合、これを読んでいる事になるであろう。僕は跡目は叶、お主に全てを託したいと常々そう思

つておった。しかし、お主は儂の前から立ち去った。無理も無い事やと分かつてはおるものの、儂は自らを叱咤するよりも、お主に恨み言の一つくらい云いたいと思つとった。手塩に掛けた逸材に裏切られたのやからのう……しかし、ここでは敢えて書けぬわ。お主は儂を憎んでおるか？やけど、この書物を解読し終えた今、お主が望む生き方を選んで欲しいとそう願つた訳や。やから、泉神社の後継者は、お主の父に一任する事に決めたのや。それが、これから先の塚原家に吉と出るか凶と出るか？それは儂にも分からん。しかし、お主には小さい世界で過ごすより、もつと広い世界で健やかにお主らしくありのまま生きてもらいたいとそう願つとる。それがどんなに過酷な世界であつてもや。これが儂の本心で、叶に託す最後の遺言や。少しでも祖父として接する機会が無かつた儂のこの言葉を受けとってくれると有り難いとそう思う。 良園」

最後の方はもう読み取るのも困難な字で書かれていた。しかし、叶にはその心意気を読みとる事が出来た。そして初めてここまで来て声を出して泣く事が出来た。有り難いとそう思った。両親に疎まれ、でも、その影から理由はどうであれ、両親よりも深く叶を支えていてくれたのだと、そう実感した。この十年。遠い距離を経て心に気に掛けていた事。思っていてくれた祖父の心意気……それに応えなければならぬ。

俺の行き先は決まつたわ……じいちゃん。

静かに叶は頭を上げた。

#5 失踪

失踪

叶の祖父の初七日になる一日前の東京は、涼しい風が木の葉をまき散らしながら、行き交う人の群れを吹き抜けて行く頃であった。もう少しすると、本格的に冬になるであろう。

そんな中、朔夜は秋元病院の一室に足を向けていた。

叶が退院してからその状況は変わっていなかった。それが朔夜自らの戒めとも云わんばかりの日々である。

しかし、この日、秋元病院は何かしら不穏な雰囲気でパタパタと騒々しかった。ただでさえ、夢見が悪く気分が優れない。それが何なのか分からず、気になりながらも足早に神楽のいる個室へと向った。

しかし、その個室の前に来た時、その原因が分かった。主治医、そして看護師達の人ばかり。それから、廊下に続いている血痕。それに気が付いた時、素早く朔夜は駆け寄った。悪夢が朔夜を呼び寄せたかのように……

人だかりをかき分け、病室に入る。すると、目に入ったのは抜け殻のようなベッドと、叶が張り巡らせておいたはずの引き裂かれた結界の札。そして壁には血文字で、

『都住朔夜へ。いずれ山城の地で待つ』

それを見るなり、ここに雅樹が来たのだと分かった。結界で傷だらけになりながらも、神楽を連れ去らなければならない理由。その理由は図り知れないが、自らを傷つけてもそうしなければならぬ事態が雅樹に有ったのであろう。それだけは分かった。

そんな中、呆然としている朔夜の肩を叩く者がいる事に気が付いた。

「都住。またお前か……」

直紀である。

「今日は塚原は一緒じゃないのか？お前らが絡むと、ろくな事が無い。未解決事件の大放しだ。不愉快な仕事が増える……こんなのは警察に任せたとしてもどうしようもないというのに……」

うんざりはしているように見せ掛けているが、眼鏡の奥の瞳の直紀は興味有り気だ。

「叶は一時大阪に行ってますよ。それにしても、城戸君も大変ですね。こういう仕事ば・か・りに当たって」

朔夜は少し苛つきながら答えた。別に好き好んでこういう事件に遭遇している訳ではない。勝手に事が運んでいるだけである。ま、占夢者と言う家業をしていれば、似たような事に自ずと当るものだが……

「山城の地か……昔の京都だな……」

話をもとに戻す。

「行くのですか？では、僕も付き添います……」

「こう行つた類いでも、事件は事件だからな。これで国民から得た税金で食っている訳だし。しょうがないだろう？ま、着いて来るのは勝手だが云つておくが、旅費は持たんぞ。俺も仕事で行く訳だし……期待してませんよ」

苦笑いして、朔夜と直紀はその場を取り仕切っている鑑識達を後に良ち去つて行つた。

「そう云う訳ですから、僕達は京都に向います。かえでちゃんには、体養を取ると云う事で仕事も断りました。ま、連絡は入る事と思いますが」

一言叶に連絡を入れておきたかつた朔夜は、荷物を片しながら叶に電話をした。

しかし、当の本人の叶はその必要はないと云う。

「どうしたのです？やはりお爺さんが亡くなつた事が影響している

のですか？」

叶はその事に関しては一瞬躊躇ったが、話さなければならぬ事があると、全てを朔夜に云って聞かせた。

「それでは、京都に向うのは考え直した方が良くも知れませんか……」

今行つても無意味かも知れないと云う結論。雅樹が云う、『いずれ』とは今では無いのかも知れないが、仲間を集めてしまっているとなれば話は別である。何とも云いがたい。しかし、そんなに直ぐに仲間を見つけれられるのだろうか？疑問は生まれる。

その件に関して、朔夜は叶に問いかけた。

すると、叶に伝授された陰陽術一武に、五行を司る者達を探し当てる為の術が有ると云う事であった為、朔夜はその事に耳を頓けた。既にその術は紐解かれ、探索の手は広がっていると云う。

雅樹はまだ仲間を集めている様子は無いらしい。そしてその紐解いた先の手がかりは、まず地形的にも狭い範囲の沖縄だと知らされた。

そして、叶の夢を見ない体質の事も把握できた朔夜はホッと息を吐く。こういう形の夢見ぬものがある事が把握できたからである。

しかし、安心はしてられない。『獏』という予言が成立してしまえば、その時朔夜はどう叶と接する事になるのであるのか？心配事はやはり変わらない。そこで、勤揺を隠す為にも朔夜は叶に、

「では、明日関西空港で落ち合いましょう。僕も一緒にいた方が良いでしょう？叶？」

こうして、明日からのスケジュールを話し合う事になった。

6 ヌタ

ヌタ

初七日を終えた叶は、何も思い残す事なく泉神社を後にした。

昨夜、一応母と父に自らの意志を伝えた。しかしそれに関して、全く関心を払わない両親であり、また、ただその申し出だけを聞き入れただけで何も叶に注意もしなかった。そして、父はこの泉神社の後継人として叶を押す事はしないと固く断言するだけだった。叶は知らなかったが、叶が出て行ったその後生まれた弟の涼に継がせると決めているらしい。

そんな両親を冷やかに見詰めて夜は明けた。まだ朝早いので冬先の冷え込んで来た空気を馱で感じ取った。しかし、これから先の事を考えるとそんな事を云ってはいられない。引き締めた表情をした叶はくぐって来た鳥居を振り返る。

見納めになるやろか？

そしてその奥の大きな御神木に目をやる。一瞬何かを呟きそうになったが思いとどまり、行くべき方向へと振り向いた。それから二度と振り返らなかった。

「あれ？朔夜……早かったなあ？」

混雑した関西空港に到着した叶は、既に持合所に座っている朔夜を見るなり目を丸くした。

「結局昨日大阪に到着して、近くのホテルをとったのですよ」

朔夜は、そう云うなり、叶の後方を指さした。

「なん？」

振り返ると、そこに直紀が突っ立っていた。

「うおっ！吃驚するやん！黙って人の後ろに立つなやお前！……っ

て何でお前がここにおるんや？」

驚きのあまり、思わず上げた大声が辺りに響く。人々がその様子に視線を向けていた。

「京都に赴くはずであつたが、都住からの連絡を聞き急遽行き先を変えた訳である。俺が同席して不満かな？」

つまり、京都に赴いても事件を解決する術は無いと踏んだ為、どうせなら朔夜や叶の動向を見ながら事件解決？に役立てようと考えた訳である。その中に好奇心と云うモノも有りはするのだが…

「暇なんか？もしかして……」

「そんな事はない。これも公務である。それにこの警察手帳が役に立たぬと云う訳でも有るまい」

懐からわざわざ取り出してみせるその手帳を見せながら直紀はシレッと宣った。

「ま、好きにせえや…で、肝心の神楽さんの行方は知れんのやな？」

「ああ、それに関しては部下に捜査してもらっている。多分錦織雅樹と云う者の行方を知り得る迄拉致があかないと思うが」

叶の探索の手は既に回っているが、見つけだせない。つまり、お手上げ状態なのである。

「マサキが術を使う事になると、神楽さんの事が気なるなあ〜逆風を思いつき気にせず使う事ができる訳やし……でも何だつてまたこんな事をしでかしたんやろか？」

朔夜のことを思うと、あまり神楽の事を云いたくは無いが、叶は一応把握しておく必要もある。

「さて、搭乗手続きをしないといけない時間になりましたよ。急ぎませんか？」

少し、上の空になっていたのか？神楽の話には首を突っ込まず、朔夜は促した。

そして、沖縄行きのチケットを手に持ち搭乗口へと手荷物を携えて三人は歩き始めたのである。

二時間掛けて沖縄、郡霸空港に下り立つと、そこは大阪とは違う空気が流れていた。まだ気候の良い温暖な空気。着ている服では暑すぎると上着を脱ぎはじめの一行。

同じ日本なのに、この気候の違いは不思議であった。が、気分は良かった。旅行者や、地元の人温かさが心地良いから。

叶達はまず地図を見ながら、現地点を確認する。そして、沖縄本島の晴眼の巫者、ユタを生業としている聖地を訪れる事にした。沖縄には、ユタのように家内での不幸や占いをする人物や、村の祭りを取り仕切るノロや、ツカサなどの神女が今もいるらしい。その辺りから探ろうと思いついた。

今のユタは商売を意識してか、大都市の邸霸市に分布しているらしいことはタクシーの運転手からの情報であった。しかし、その中でももう引退して、大都市から身を引き、一番の神聖な地。御嶽の有る場所で弟子を育てていると云う人物に心当たりがあると云う事なので、その人物に会おうとタクシーの運転手に全てを任せ朔夜達はそこから動いた。

「変やな……何か遠ざかっているような感じがするわ……」

叶は、何かを感じ取ったのか流れ行く町並みを眺めながら呟いた。しかし、タクシーはノンストップで動いて行く。そして、その運転手の運んでくれた先は海岸線の小さな山の麓で朔夜達はタクシーを下り、お札を云って山の頂きにあるその聖地へと赴いたのである。

そこにいるユタは女ばかり揃っていて、迂闊に男が入って行くのは容易では無かったが、直紀の手帳が役に立ち、中に通してもらった。

しかし、その師匠格の人物とあいまみえる迄、かなり時間が掛かった。それもそうだ。アポもとらずに、突然押しかけてもそれはそれで問題があると云うものである。通されたその神聖な場所は、木造の掘立て小屋のような所であった。

「お話はあらかた聞きました。それで、あなた方は陰陽五行の陰陽

師を捜しに参られたそうですね？」

標準語で問いかけられ取り合えずホツとした。

沖縄の方言はかなり解読しにくいからである。しかも、かなり年輩の方なのでやりにくいと云うのもあった。

「そうなのです。こちらに、その五行を司る方はいらっしやいませんか？」

朔夜は静かに問いかけた。

「残念ながらありません。ここには、ハンジ（吉凶判断）マブイグミ（祈祷の一種）ヌジファ（死雲供養）を生業とした者達が集っている庶民に根強い需要ある巫者で成り立っております。それに、沖縄全土を合わせても、千人〱二千人のユタが居りますが五行を操るような者は滅多に現れませんよ」

その言葉に、

「なんや、期待外れやなあ」

ボソリと叶が呟くのを、失礼であろうと直紀と朔夜は座布団に正座している叶の足をつねった。

「痛い……」

ただでさえ長い間正座していた為、疹れを切らしていた。その上に潮激を受け思わず口に出してしまったのである。

「若い方には正座は辛いでしょう？足をくずされても結構ですよ……」

……

苦笑いしながらその老女は叶に促した。すると、気にせず胡座をかきはじめる。その様子を見ていた朔夜と直紀は呆れた顔をした。

「ただし、この沖縄本土にはいないと申した迄でして、噂では、宮古島に弟子格の優秀なユタ（神力カリヤ）が生まれたと聞き及びます。念のため足を運んでみるのはいかがでしょう？」

優秀なユタ？それが、五行を司る陰陽師であるかどうかは分からないが一つ手がかりが出来た。

「宮古島には、郵覇空港から飛行機に乗るか、船を利用するかで行き来が出来ます。このくらいの情報でしかお投に立てませんが、他

にやらなければならぬことがございまして、この辺で失礼させて頂いてよろしいでしょうか？」

何かと、忙しい身なのであろう。その事を察した三人は、お礼を述べ速やかに下山した。

そして、再び那覇空港へとタクシーを呼んでもらい足を運んだのであった。

宮古島は沖縄本島から南西に位置する小さな島である。三人ともその島に行った事がない為土地勘が無い。不安材料は揃ってはいるが、南国の気候は良いなあと云った感嘆の声は上がる。まだ初夏だと云ってもおかしくなく、少し厚めの半袖でも十分であった。

夕食前ではあるが、フライト迄の時間を考えて近くの店で食事をとっておいた。

「郷土料理って良いもんやなあ〜ゴーヤチャンプルー一度でええから食べたかったんよ〜」

その土地の食事をする事を楽しみながら二人はテーブルを囲う。まだ見ぬ陰陽師の事は忘れて敢り敢えず一息付いた頃、搭乗時間が来たので席をたった。

宮古島に着くと、沖縄本島よりものんびりとした空気が三人を取り巻いた。まるで楽園のような蒼い海に珊瑚礁。こんな所で事件が起こる事も無いだろうと思える程、穏やかである。

しかし、ここにいると云われるその者を捜し出すのは難しい。そこで、近くの交番でユタに関する事を聞こうと空港から歩き出した時、一人の小学三年生くらいの少女が後ろから叶の足にしがみついて来たのである。

「ハイタイ。お兄ちゃん？何処に行くの？」

その子は長い髪を頭の上の方、横で二つに丸く纏めた可愛い少女であった。そしてハイタイとは、こんにちはと云う意味である。「ん？どないしたん？お母さんとはぐれたんかいな？」

叶はその足を止めて振り返るとその子供の背丈に合わせてしゃがみ込んだ。

「うっん。違うの……お兄ちゃんに用があるの……着いてきてよ！」
それだけ云うと、女の子は逆方向にスタスタと歩き始めた。

「何ですかね？叶を見知っているような感じがあつたようですが？」

朔夜はそうは云うが、全く知る者でもない。大体、叶に宮古島に知り合いなどいるはずがないのである。

「なり振り構わず愛嬌振りまいておるからだ。子供にも人氣が有るとはお前……ロリコンに目覚めるなよ？」

茶化したように直紀が云うものだから思わず叶は顔をしかめた。

しかし、行くあても決まらずうつろつくのも面倒だと二人は思い少女の後を追いかけた。

「お兄ちゃん？」

「何や？」

道中、かなりの距離を歩いたような気がする。と云うより、大荷物を抱えて少女の手を握りその上歩幅を合わせているからと云う事もあるのかも知れない。

「何故、そんなに気を垂れ流しているの？習わなかった？」

「氣？」

叶は、この少女が云いたい事が分からなかった。

「人それぞれが持つている『氣』よ……それじゃあ、自分が陰陽師だと名乗っているのと同じだわ？習って無いのなら後で教えてあげる」

それで八つと気がついた。この少女が云いたい『氣』とは、自らが言う所のオーラなのだと。

「お嬢ちゃん。アンタまさか見えるんかい！てか俺が陰陽師と何で分かったんや？」

叶の後ろについて歩いている朔夜と直紀もその言葉を聞いてハッと警戒心を強める。今迄この少女の見た目に騙されてノホホンと

ついて来たが、考えてみたら妙である。

「おじちゃん達も、すっかりついて来てね。お荷物は嫌いだから」
叶がお兄ちゃん、朔夜と直紀がおじちゃん？一瞬叶は笑いそうになったが、ここは控えておいた。そりあそうだろう、この子から見たら、おじちゃんに間違い無い。しかし、後方から殺気を感じた叶は取り敢えず先ほどの質問に話を戻した。

「黄緑色の『気』は滅多に無い色だからよ……学んで無いの？まあ粗悪な環境で育って来たならしょーがないけど……良いからついておいでよ」

粗悪な環境と罵られてさすがの叶も一瞬腹を立てそうになったが、自ら見えているオーラを確かに把握していない分何も云い返せない。ただ、この少女は可愛いくせにかなり口が悪い事だけは良く理解した。

それから十分経った所であろうか、少女が云う目的の場所に辿り着く。この宮古島では珍しく大きな屋敷であった。赤瓦葺の屋根に沖縄特有のシーサー。石敢當などは至る所見受けられるがその中でも圧倒的に雅びやかである。

「おばあちゃん、連れて来たよ」

その屋敷の一番奥になるのであるのか？大きな広間に通された。

「よう参ったな。砦家へようこそ。そこに御座りになられて下さいまし」

九十歳はいつているであろう？かなり年老いた老女が叶達を待ちわびていたのか、静かに腰を下ろしていた。

「こちらに到着される前に、沖縄から連絡が入ってりました。それで水城を迎えに行かせたのです」

厳格な威厳ある老女はそう云うと、静かに微笑んだ。しかし、

「連絡と申しますと、沖縄本島のユタの師匠格のあの方でしょうか？」

「そう、尚古さまからです。五行の陰陽師を捜していらっしゃるん

ですわね？」

そこ迄云うと、叶が勢い余って乗り出すように訊き出した。

「ここにおるんか？その五行を操る陰陽師は！」

「おります。ほれここに……」

すると、その老女の横にちょこんと座っている水城の肩をポンポンと叩いた。

「は？」

叶は絶句した。今の今迄一緒にいたその生意気な少女が陰陽師？それもこんなに小さい子が？確かに本島の師匠格の人物は産まれたとは云っていたが、こんなに小さいとは思っていなかった。

「今、私の事をあり得ないとそう思ったでしょう？そういう固定観念が『気』さえ操れないことに繋がるんだわ！」

機嫌を損ねたのか、水城は可愛い顔を思いつきりしかめた。そして、

「おばあちゃん、本当にこの人なの？」

と、訝しげに問いかける。

「千里眼の力は間違い無いですよ。それに、代々伝わっている、言い伝えも違って無い。あなたになら分かるでしょう？」

逆に水城に問いかける。

「……」

分かつてはいるが、肯定したくない様である。

「で、五行の内、何を司つとるんや？」

早速話をもとに戻した。未だにシヨックは隠せないが。

「この子は火を司っております。もともと、この家はユタが多く生まれる者ばかりでしたが、ここ最近言い伝え通り、陰陽師の子が生まれ続けました。しかし今回は、珍しく一族とは掛け離れた水とは相反する火を操る者として生まれた時から大変な騒ぎでした。泣き声をあげる度に辺り一面火を放つものですから……」

その様子を考えると恐ろしい。よく火事を起さなかったなと思える程に。

「それで、言い伝えとは？」

朔夜は、まさか雅樹と叶を取り違えているのでは無いかという考えに到りその老女に問いかけた。

「それは……」

火の陰陽師この地に生まれし時、山城の国に集う陰陽五行蔓延る時、夢見ぬ黄緑色の『氣』を纏いし陰陽師、それに立ち向かう。我忠す。五行集う事勿れと。

「つまりは、五行に生れついてその手助けをすべきでは無いと云う言い伝えなのですね？」

朔夜は素早く内容を把握し、問いかけた。

「そう云う事です」

その言葉に三人はホツと息を付いた。もともとそう云う事ならば、ここ迄足を運ぶ事は無かったのでは無かるうか？しかし、雅樹がこの地に訪れたとしたらどうであろう？色々と考えてみる。

そんな時、

「おばあちゃん？私、この人達と一緒に行って良い？」

水城の口から、とんでもない言葉がもれ出た。自ら出る必要もないのに、一緒に行きたいなどとはどう云う見なのであるうか？危険な目に遭うかも知れないのに……叶達にはこの小さな水城の考えにいる事が分からなかった。

「良いですよ。あなたの思うままに行動しなさい。ただし、京都に赴く際は連絡を入れなさいね」

勝手に話を進めているこの一家はどう云う事なのであるうか？呆気にとられていたが、

「あ……ちよいまち！危険かも知れんのに、勝手に話し進めんなや？それに、子供連れの旅なんか、ごめんやわ！この先、広島に行つて陰陽師探しをせなあかんのやで！」

その言葉に、

「子供、子供ってうるさいなあ〜これならどうよ？」

印を結び、呪文を掛け始める水城。すると、ポンツと云う音とともに、十四、五歳の女の姿に変化した。

「！」

変化の術？まるで、忍者でも見ている様であった。そこには幼かったあの水城はいない。少なくとも中学、高校生並の少女だ。

「これなら文句ないでしょ？ただしこの術、目くらましかから、長くはもたないけどね……」

舌を思いつきり出して、あかんべえをする辺りは子供である。すると、たちまち元に戻った。

考えてみたら、叶がこの歳には既に陰陽師として仕事をしていた。それを思い出し、

「しゃーないなあ……ただし、旅費はそっち持ちやからな……」

やむなく同行を許可したのである。

「移動は子供の方が何かと都合が良いから、子供に戻るよ〜だ」

確かに、子供料金を考えると、水城は小さいままの方が良いかも知れない。特に飛行機に乗る場合半額近く違う。

そんなやり取りを見て、微笑みながら老婆は、

「今日はもう遅いですから、御三人共にここに泊まっていきなさいまし。明日からまた移動でしょう？ぐっすり休まれると良い」

それだけ云うと、賄いさんに声を掛け、晩御飯を作るように促したのである。

#7 水城の過去

水城の過去

夜は、上弦の月が綺麗であつた。星も、東京や大阪で見るものは全く異なつた明るさで、まるで空に無数の宝石を鑲めたかの様である。そんな中、縁側で涼みながら叶は思いに耽つていた。

「綺麗な夜空でしょう？ 都会では見れない貴重な夜空でしょうに……」

まるで、ここに一人で叶がいる事を察知したかのように水城の祖母は声を掛けて来た。

「水城のこと、宜しくお願いしますね……あの子人一倍気が強いものですから、色々にご迷惑をおかけするかも知れません。そこで、誤解のないようにあの子の生い立ちを少し明かしておきたいと思います」

叶の横にある石に腰を下ろし、ゆつくり夜空を仰ぎながら、思い出すように話し始めた。

「あの子には、両親がいないんです。そこには一つの事件がありました……」

そう云えば、夕飯の時両親を見かけなかった。

気にはなっていたが、ここで聞けるのならと叶は問いかけた。

「事件？」

「もともとの子の両親と水城はここでは無くここから一キロ離れた家に住んでおりました。そして、水城の母もユタであり、水の陰陽師でもありました。そこで水域の力を知りその力を制御する為にある術をかけていたのです。しかし、一日。ただ一日それを怠つた為に、ある日寝入った夜更けに火災が発生しました。その火は一夜をかけて消火活動は行われましたが、家は全焼。ただその中でただ一人炎の中、水城が生き残つたのです」

「何で、忘れたりしたんや？」

疑問だった。そんな大切な事を忘れるなんて……

「水城が五歳の誕生日の日でした。誕生日のお祝の為、朝から色々
と用意をしていたので、慌ただしくて忘れてしまったのでしよう……
それから云うものは両親の変わりにあの子を見守って参りました。
全てを教えて。でも、あんな風に振る舞ってはいませんが、小
さかったあの子は記憶の中で自分が生まれてきたその疎ましさを忘
れてはいない様です……一日に一回は、必ずその焼けてしまった家
を見に行っているようです。自らの戒めを感じる為に……ここに居
ては、そのしがらみを背負うだけ背負ってあの子の心は罪というも
のから逃れることは出来ません」

愛されて生まれて、とことん愛されて……その代償が、両親を死
に追いやった。叶とは相反するが、孤独と言うその気持ちは十分に
にしてみる。

「分かったわ。それで、宮古島から一度出してみる方がええと思っ
た訳やな？」

「そうですね。忘れる事が出来なくとも、少しは気が紛れるとそう
思いた訳です」

そう云うと、ゆっくりと腰を上げた。

「もし、京都に入る事になり、あの子が五行の者達に寝返らないよ
うに、云っておきます。あの子の誕生日は、寅の年の八月三十一日。
そして、逆風対処法は、首から下げているお守りのお札です。毎日
取り替えて使用しておりますゆえ。それをとられると、術は逆風と
なりあの子に跳ね返ります」

陰陽師にとつての命にも関わる大切な事を聞かされ、一瞬戸惑う
叶であったが、それだけ本気なのであろう。云い伝えを守る為であ
る。その辺りは、家族も惜しまないと言う訳だ。

「承知したわ。さて明日早いし寝るかいなあ」

と、叶も立ち上がった。

そして、振り返るとヒンプン（屏風）の影に水城が身を隠しながらこちらを窺っていた。

「……」

今迄の話を聞いていたのか？水城はおし黙っている。

「……よお。明日は早いでゝ早寝んかいなゝ子供が起きとる時間やないでゝ」

気を使って、叶は誤魔化した。すると、

「なによ、せつかく『氣』の使い方を教えて来てやったのに、寝てろって云う訳！？」

つんのめるように歩いて来て靴を履いて庭に下り立つ。

「あ、そういや、そんなこと云ったなあゝ」

思い出したように、顎を指で搔いた。

「チャッチャとやるわよ。どうしようもないんだから……これが伝説の陰陽師だとは呆れるわね」

本当に口が悪い。かえでとどっちが勝るだろうか？そんな事を考えながら今ここにいないかえでの顔を思い出しながら微笑んでしまった。

「笑ったな！もう教えてやらない！勝手に垂れ流しておけばいいのよ！」

頬を膨らませて、水城は戻ろうとした。それを叶は追いかけて、止まらせる。すると、いきなり肩を小刻みに震わせ水城は叶の元で嗚咽した。

「何やねん！一体！？」

警きのあまり、叶はどうすれば泣き止むのか対処に困った。その様子を見ながら、祖母は、

「泣かせてやって下さいましな。この子、両親が亡くなってから一度も泣いてませんから……」

それだけ云うと、全て叶に任せ静かな足取りでゆっくり家に入っていく。

溜りに溜ったものが今やっと転機を迎えるとそう感じ取ったから

水城は泣いたのかも知れない。そう思うと、小さなこの少女の頭を撫でてやった。それしか叶には出来なかったのである。

8 出発

出発

昨夜、水城が泣き止む迄待った叶は、その後『氣』を操る特訓を受けた。それが夜半迄掛かった為、寝不足である。しかし、その特訓をやった当の本人の水城はピンピンとしていた。これが若さと云うモノかと叶は羨ましく思う。こんな時代も有ったはず。そう、自分にも。

そんな事を思っていると、朔夜が、問いかけてきた。

「目の下に隈出来てますがどうしたのです？昨日は遅く迄起きてたようですが？」

それに対し、いやなに……と、誤魔化して叶達一行は宮古空港迄来ていた。周りの独特な景色を楽しみながら。まるで旅行気分である。しかし、目的を持った今、歳若い水城が加わった一行は、まず那覇空港迄出なければならぬ。それは、これから先の重要な扉を開く一歩。

叶は、踏み出す脚を噛み締めつつ自分を見失わないようにと誓った。

そんな中、ほのぼのとした空気は、一行を包んでいた。

「それにしても、子連れの旅となると、まるで僕達は保父さんになりた気分ですね……」

朔夜は、今の状況をのんびり語った。それに返す叶も、

「お前、子供嫌いだったか？」

のんびりと質問に質問で答える。

「いえ？嫌いではありませんよ。ただ好かれる要素を持っておりませんから……」

道中、そんな話をしながら歩く。

そんな中、クスリと朔夜は笑った。その理由を訊こうと思い、

「何やねん。一体？不気味やな」

「いえ、何でも有りませんよ……那覇空港に到着したら分かるかも知れませんか？」

意味深な朔夜に、何度も理由を聞き返したが教えてくれない。ま、それでも良いかと叶はそれ以上突っ込むことは無かった。

のんびりとした旅の始まりであった。が、それも宮古空港に到着してから徐々に変化して行くのであった。

#9 犯人

犯人

まず、直紀が呟いた。

「ん？何処かで見た顔だな……」

はつきり覚えている訳ではないが、何処かで見た顔だと思ったらしい。それも、出くわしたとかそう云う類いではない。カシヤカシヤと直紀の頭の中でコンピエーターが作動する。こうやって過去のデータを洗っているのである

それは、宮古空港の搭乗手続きが終わっても続いた。思い出せないとも気に掛かるらしい。否そう云うものだが。かなりのスピードで過去のデータをはじき出して行く。しかし、飛行機に乗った今でもまだ続いていた。

「思い出せない……」

ボソボソという直紀の独り言が耳につく。

飛行機に乗った叶と朔夜と水城は飛び立とうとする楽しみを感じながら席に着いていた。しかし、何度も繰り替えされるその言葉が気になり耳を傾けざるをえなかった。

「お前が思い出せんのやったら、大した人物でもないやろ？気にすんなや？」

叶は呆れて言葉を発する。

「単純な頭の持ち主はそう云うのであろうな。でも簡単に割り切る事は出来ん……」

ちょうど直紀の視界に入る位置にその人物は座っている。二十歳半ばと云った感じで、サングラスをし、髭をはやした人相に、沖縄ににいるというのに暑いだろうと思われる厚手のコートを身に纏っている。それ以上特に特長はないが一風変わった感じの人物。

「何かの手配にかかっている覚えもあるのだが、何の事件だっただ

ろうか……」

その言葉に、水城はあつさり、

「あの人、殺人犯だよ。しかも、いわく付きの」

水城は、自ら用意していたスナック菓子を背負って来たりユックサックの中から取り出し興味無しに口に頬張りながらポロリと呟いた。

その言葉に、直紀たち三人は言葉を失った。

「何？何故お前にそんな事が分かるんだ？」

「私は何だつて分かるよ。ユタの血も引き継いでるから……」と云つても、過去の事しか分からないけど？未来を知る力は無いから」

我関せずと行った風情でお菓子を頬張りながら興味無しに云う。

それを眺めながら直紀は、

「殺人犯……あ、思い出したぞ！確か、鹿児島で指名手配している連続殺人のあの犯人に似ているのだ！」

そう叫ぶや否や、直紀は直ぐさまベルトを外しその者が座っている席へと足を運んだ。念のため懷に拳銃を装備して。

「俺はこう云う者だ。少し話を聞かせてもらえまいか？」

単刀直入。警察手帳を見せたたん、男は焦った様にサングラスで表情が分からない顔を一瞬強張らせた。

「刑事が……俺に何の用だ？」

とぼけるような振りをして供え付けの雑誌に目をやる。

「鹿児島で起きた連続殺人犯人の似顔絵……お前はそれに酷似している」

その言葉に、

「似ているってこんな顔の人間など何処にでもいるだろう？他人のそら似で犯人扱いされても困るのだからね」

犯人と断定した訳ではない。それなのに自ら犯人では無いと云った。何処までもシラを切るつもりなのであろう。それを見越して、

「では、そのサングラスを外してもらおうか？三好浩輔」

ハッキリと思い出している直紀の頭の中は、まるで殺人現場に居

合わせたかのような映像のように鮮明である。

あの連続殺人事件は悲惨だった。単なる物取りなら可愛げが有る。しかし無差別に人を殺して楽しんでるかのごとくの現状。犯行現場に残された、一台のビデオカメラをも意識し、英雄気取りでピースサインを残し立ち去っている。これは全国ネットで報道されそれを元にし指名手配をされていたはずだ。

「サングラス外せて？ そんなんで俺を捕まえよう何て甘いんだよ！」

開き直ったのか、突然ベルトを外し立ち上がる。

瞬時に直紀を突き飛ばすと、座席前方へと走り始めたのである。

「お客さま、ただいま飛行機は飛び立った所です。まだお歩きになられては……」

「邪魔だ！どけ！」

スチュワーデスの女性をも退けコックピットへと猛ダッシュをし始める三好浩輔。しかし、途中でその足を止めた。

突然の騒ぎに何が起こったのか分からない乗客はその男の行動に注目す。朔夜、叶もその事に気が付き倒れている直紀の所まで駆け寄った。

「ハイジャック、一度経験しておきたかったんだよなあ」

舌砥めずりをし、歓喜の表情の三好浩輔。サングラスを取り外し振り向きざま身に纏っているコートを広げてみせた。そこには数十個にもおよぶ手製のダイナマイトが取り付けられていた。

これには乗客の恐怖を駆り立てるものがあつた。しかし、その騒然とする空間に、ただ独り静かにそれを眺めているものがいた。水城である。

「おじちゃん？ そんなもの身に付けて何しようって云うの？」

平然としたその言葉に、ガキが事の次第を飲み込めてないのだとせせら笑っただけ笑っている三好浩輔。

「お前らはここで死ぬんだよ。誰にも邪魔はさせない。恐怖にのいて死ね！」

コートのポケットからライターを取り出し火をつける。ブワツという音が辺りに響いた。

周りは混乱に陥り、悲鳴が上る。しかし、次の瞬間、そのライターは大きく火を放ち弾けとんだ。

「何!？」

三好浩輔は何が起きたのか分からず、それを手放した。すると、床に転げ落ちた際、絨毯に引火したのである。

広がる火の海。

「これだから、頭悪い人は困るんだよね」

水城はベルトを外し、朔夜達の側迄歩み寄ると静かに印を結んだ。

「沈！昇華！」

すると勢い良く燃え上がったその火が操られるかのように静かに鎮火して行つた。ただ黒焦げになった床の跡だけが残る。

そして、前方から後方に座っている人間に向つて青白い炎を口から吹き出した。それが辺りに充満する。

すると今迄騒がしく恐怖におののいていた者達の目蓋が次第に閉じて行つた。

「何をしたんや？水城……」

呆氣にとられていた叶は目を瞬かせながら水城に問いかけた。

「一種の催眠術。わざわざ陰陽師の技を他人に見せつける必要はないでしょ？」

確かに、水城が云う事は正解だ。こんな所見られると後々厄介ではある。ただしこの事件は闇に葬られてしまうが……

「おじちゃん……確か朔夜って言うのよね？夢を売買出来るんでしょ？それを応用して、記憶操作出来る？これだけの人数がいると、一気に片が付くとは思っただけど」

しかし、昨日の夜睡眠をとってしまった為朔夜は躊躇った。

「出来ないの？」

「いえ、何とかしてみましよう……」

水城の口調があまりにも自分を試しているかのようで、ここで後

には引けないと思った。挑んだ事の無い分野であり、自らにその力があるかどうかなど分かりもしない。しかし占夢者を生業としている限り醜態は見せられない。それに、足手纏いと罵られるのはごめんであった。

そこで、一気に息を吸い込むと後は叶達に任せることにして、やった事の無い未知の領域へと足を踏み込んだのである。

その様子を静かに見詰め、水城は微笑むと、再び現状に取り残された連続殺人犯、三好浩輔に目を向けたのである。

「私の前ではそんなもの何の役にも立たないわよ？どうする？ここは空の上。逃げ場はない事だし神妙にお縄に付く？」

直紀を前に水城は薄っすらと笑みを向ける。

「ふざけるな……こうなったら！」

突如、前方へと身体を向けると、一気にコックピットへと駆け出した。それに気が付き、叶、直紀、水城はその後を追いかけた。

狭いコックピット内は、後方で起こった事を知らずに、安全に那覇空港迄のフライトを続けていた。

しかし、それがいきなりの侵入者で阻まれたのである。

突如、揺れる飛行機。後を追いかけていた叶達一行は壁に体をぶつけるハメにあう。

「にやろー何をするつもりやねん？」

「コックピットに向ったって事は、操縦を回避して何処かに不時着させるか、落下させて心中するかのどちらかでしょ？お兄ちゃんはどうちがお好み？」

好みも何も、死にたくはない。その質問に、

「バカをぬかすな！そんなの決まっているではないか」

「生きる」

叶と直紀は声をそろえて叫んだ。

「グーな答えね」

一気に揺れる狭い通路を駆け抜け抜け叶達はコックピットへと入り込んだ。

10 逮捕

逮捕

機長の首根っこにナイフを突き付け三好浩輔は入って来た三人に向って叫んだ。

「ここでこいつの喉を掻き切ったらどうなるかな？ 一気にこの飛行機は落下するぞ！」

この様子に隣の副操縦士はもう気が気ではなく、三好浩輔の云いなりで、操縦を怠っている。

手放し状態と云っても良い。

「おい、燃料が尽きる迄飛び回れ！」

三好浩輔は、指示を出す。

「そのナイフ、よく持ち込めたものだな」

ゲートをくぐる前、持ち物の検査がある。細かい金属も反応するほど最近の物は大変敏感だ。それなのに持ち込んでいるとは侮れないと直紀は思った。

「なあ、持ち込んだ訳じゃない、飛行機の中に有ったものを拝借しただけだ……このナイフと、お前が所持している拳銃。どちらが早いだろうなあ」

「なるほどな。で、俺達をどうするつもりだ？」

「死の恐怖を味わってもらう迄だ。おい、この燃料はどれだけ保つんだ？」

その質問に、喉元にナイフを突き付けられた機長は脂汗を垂らしながら、

「長くて一時間ほどです……那覇迄の燃料しか入れていない……」

隣の副操縦士を見ながら震える唇で応える。

「だとさ。どうするよ？ 死への秒読みが始まったな！ 根気の勝負だぜ？」

直紀は諦めに入った。拳銃はどう考えても引き金を引くより早く喉元を掻き切るであろう……もしもの事もある。この状態ではお手上げだった。そんな諦めモードの直紀を後ろから叶がつつく。

「ここで俺に代わってくれんやるか？ こういうのは術を使った方が手っ取り早い……直紀お前は手錠を用意しとけや」

耳打ちするようにボソボソと呟く。

確かにこういう場合物理的な事より手取り早いと悟った直紀は叶に一任する為に位置を入れ代わった。

「何だ。てめえは？」

突然の交代で三好浩輔は訝し気に叶を見る。

「ここにいる刑事の友人どすえ〜で、殺人って面白いんか？」

営業スマイルで問いかける。こんな深刻な場面でこの笑顔は逆に三好浩輔を苛つかせた。

「楽しいさ、この人生その為に生きているといっても過言じゃないぜ？ 人が苦しみじめに血を流す姿。それが快感だ！」

三好浩輔の甘美な妄想は尽きない様子で、叶は笑顔の裏でむかっいていた。

「なら、ここでお前が死ねば良いんや。殺された者が感じたと思われる快感をお前も感じるや！」

静かに両手を合わせ印を結ぶ。その行為が良く分からない三好浩輔はジツとただその様子を眺めていた。

「縛！」

すると、全身の力がいきなり抜け突如機長の首筋に向けられていたナイフが操られるかのように、自らの心臓に向けられた。

「な……何だこれは……」

三好浩輔から解き放たれた機長はハッと気が付き操縦桿を握る。無事飛行機は安定した。そして、那覇へと航路を急ぐ。その様子に、直紀は安心した。

「死を間近にしてみてもそれがどう云うものだか自ら感じてみてどうや？ 勝手な妄想はそれまでにしとけや！ 直紀、出番やで？」

振り返り、直紀に全てを任せようと叶が入れ代わろうとした時、事態は急変した。いきなりの吐き気が叶を襲ったのである。よろよろとした足取りでよろめく。その様子に気が付き、直紀は叶を支えた。

「どうしたんだ？塚原？」

「やばい……この状況を察知して、こいつに付きまどった死霊が集ってきたんや……」

叶は三好浩輔に自らの罪を思い知らせる為に脅してナイフを心臓に構えさせた。しかし、その事象を都合良いと死霊がナイフの先を押し進める。

「早よ手錠をかけんかい！マジでヤバいわ！！」

直紀は三好浩輔が握っているナイフを持つ腕を鷲掴みにする。しかし、押し進められて行く行為はあまりにも強烈で、直紀の力では押さえ切れない。

「無理だ！余りにも力が強すぎる！！」

直紀は必死でその行為を止めようとしていたがその行為は虚しい。このままでは自らの心臓を貫き本当に死んでしまう。許せない犯人ではあるが誰もこいつを殺すつもりなど無い。罪は違う形で償うのが元来ある形だ。死して罪を償うと云うのは何人たりとも有ってはならない。

「どいて、私が止める！」

叶の後ろに控えて事の次第を見聞きしていた小さい水城が二人の間をかくぐり、ひょっこり姿を現し直紀の前に出た。

両碗を頭上に翳し、念を込めると一気に死霊をなぎ払う。その後澄み切った空気がコックピットに流れ込んだ。

「お兄ちゃん？このくらいの怨霊に気分悪くしてるとこの先保たないわよ？」

水城はクスツと笑うと来た道をテクテクと振り返りもせず狭い歩幅で歩いて行った。

その後ろ姿を見ながら、

「えらい強烈な味方やな……オエっ気持ち悪……」

叶はそのままトイレへと駆け込んでいった。

その様子を見ていた直紀は呆れながら一息つくとも三好浩輔の両腕に手錠をしっかりとはめた。そしてその上に自らの上着をかぶせると、

「鹿見島迄貴様を連行する。どれだけの刑を受けるかは分らんが、無期懲役は確実だろう。きちんと罪は償え！」

直紀はそれだけ云うと、コックピットの機長、副操縦士に一礼し静かにその場所を離れた。

この一騒動は一件落着いた訳である。

1 1 記憶

記憶

その頃の朔夜は氷山の一角の夢の階層を通り抜け、人の記憶の階層に潜り込もうとしていた。

初めての経験で、入り込んだ事の無い階層である。夢の階層を通り過ぎる時はさっぱりとした様な空間でいろんな人が見ている夢の光景が頭を通り過ぎて行った。

しかし、止められた記憶の階層はドロドロとした空間でそこに入り込むには一苦労した。どのくらいの時間が過ぎただろう？全く分からない状況であった。

それを抜け出ると、一本の導く様に光る線がいくつにも分かれて張り巡らされていた。しかしその線にのつくとある地点へと朔夜を導いてくれる。そして、あの瞬間の時間の止まった空間に紛れ込んだ。

その空間を見渡すと、驚きの表情と、不安にかられる人マの McCormack が……表情が固まったまま静かに残されていた。

どうすれば良いのか？夢の売買とは違う。

そう考え込んでいると、人々の視線の先に有る三好浩輔のダイナマイトが目に入った。だからそれを外しとっていく。だけど三好浩輔の身体は石のように固まったままでその爆弾を取り外すのは容易であった。それを一まとめにすると刑事であるだけに、ま、ここで良いでしょう。と直紀の鞆に仕舞い込んだ。これで一つはクリアー。あとは、乗客達の表情や視線を変える事である。

立ち上がった者、恐怖にかられた者、などなど……それを一人一人直して行く。そうする事で、記憶の中の抹消を試みた。見なくて済むなら記憶に残らないとそう踏んだのであった。

地道な作業ではあったが、確実にそして、つじつまが合うように

しなければならぬ。それには労力がいった。しかし、それが大切な事なのだと分かっている為気を抜くことは出来ない。だから朔夜はこの作業を黙々と行った。

そして、全てが終わったとき、この空間から抜け出ようと始めに辿ってきた光る線に向って手を差し伸べ意識を上昇させようとした。しかし今の今迄止まっていた時間が、陳腐な3D画像のように歪みをもたらしした。光る線が遠ざかって行く。

『これは一体、どう言う事ですかねえ？』

歪みまくる記憶の断片。不思議な現象になす術なく見守っている朔夜を取り囲み、四方から空間が体中を締め付け始めたのである。

犯人逮山禰で、無事締めくくったこの事件。コックピットから帰ってきた水城は、自らの席に座ろうと足を運び始めた時、今眠らせてある乗客の異変に気が付いた。異変と言うより、霊的存在を充満させているその状況に気が付いたのである。そんな折、叶がトイレから戻り、直紀が犯人を連れて戻ってきた。

「おい。どういふこっちゃ？この状況まずいんとちゃうか……朔夜！」

叶は、素早く感知し眠りに就いている朔夜を抱え上げ上うとした。しかし、

「触れてははダメだよ！こんな時に悪霊が蔓延ってるなんて……どういふこと？」

「どうしたらええんや？」

「お兄ちゃんには、悪霊払いをお願いするわ。援護してね！私は記憶階層迄足を運んでみる！」

云うや杏や、直ぐさま意識を飛ばす為に眠りに入る水城。突如床にバタリと倒れ込む。その姿に驚きの表情の直紀。三好浩輔もこの現状がよく分かってはいない。コイツラは一体何者なんだと云わんばかりの表情で訊し気に自由の効かない両手を眺めてから事の成りゆきを見つめた。

「塚原？これはどう云う事だ？」

「今はごちゃごちゃ云つとられんのか！……すまん事情は後で話すわ。少し離れといてくれや！」

こう云った状況下で術に取り組むのは初めてである。失敗したら後戻りなど出来はしない。叶は朔夜と水城が倒れ込んでいる床に自らの人さし指を噛み切り血で五芒星を描くと結界を張り、その後素早く念を込めて空に九字を切る。

「臨・兵・闘・者・開・陣・列・在・前！」

そして、この乗客席に充満している悪霊に向って水城の援護の為術を放ったのである。

水城自身も記憶階層に入るのは初めてであった。ユタであると共に陰陽師もこなして来た訳ではあるが、めったなことがなかったため記憶への干渉を試みた事はない。だから自分でも初挑戦である。

朔夜にはああ云ったものの、自らどうすれば良いのか見当も付かない。取り敢えず、夢の範囲迄は到着する事が出来た。

これだけの乗客がいれば流れては消えて行く思考の多さは数限り無い。分かつてはいるものの、偏頭痛が起こりそうになる。

「記憶階層はどっちなのよ……」

少しでも、針の穴のようなそんな小さな手掛かりでもいいからと目を見張るように周りを見回した。

すると、歪んだ黒い空間がチラチラと水城の視界に入り込んでくる。それを頼りに一本の線に導かれて一気に夢の範囲を抜け出したのである。

「おじちゃん……掴まって！」

幽か聞こえて来る声に気が付き、朔夜は歪んだ空間を必死で押さえて目を見張った。すると頭上に一筋の光があるのが見える。

「水城……ちゃん？」

ぐぐもった声しか出せずもがいてはいたが、意識ははつきりして

いた。

「これはどう云う事なんです？」

「良く分からないけど、霊が絡んでる。このままじゃ危険だよ。とにかく私の手に掴まって！」

小さい掌が朔夜の目に焼き付いた。

しかし、朔夜の記憶にあるフラッシュバックが音を立てた。忘れる事の出来ない事。父を蝕んだあの出来事。自ら入り込んだ夢にまうわる忌むべき出来事。それを思い出し、朔夜は水城の手を取る事を躊躇した。

「ダメですよ……水城ちゃんは戻りなさい……」

朔夜はこの状況下、心から必死で叫んでいた。

父のようになってもらいたくない。それが朔夜のこの状況下での想いであった。恐れている自分。助け手は差し伸べられているのにどうしようもない感情が朔夜の心を支配していた。その心を読み取って、

「私なら平気だよ。過去に有った事は、逃れられない事実だけど、それを取り越えてこそ本当の自分を覚醒できるんだから！」

過去を見通せる水城の事を思い出した。この少女には隠し事など出来ない。ハッと気が付いた。しかし徐々に狭まって行く空間。その中で、水城は必死で朔夜に呼び掛ける。割り切れない、自らでしか乗り越えられない岐路。それが今なのだとそう云い聞きかせる為に……

「私は陰陽師なのよ？信用できないかな？」

その言葉に、朔夜は我に返った。自らの側にいる者は、過分にも自分を支えてくれる者だと気付いたのである。

「分かりました。お願いします……」

差し伸べられた腕を掴み、こうして朔夜は歪みきったその空間を抜け出る事に成功したのである。

抜け出た先は、一本の光る糸で紡がれていた。それを頼りに黙々

と夢の範囲迄上昇する朔夜と水城。

「私ね、おじちゃんの気持ち分かるよ……」

突然、水城から話し掛けてきた。

「？」

「私ね、お父さんとお母さん殺しちゃったんだ。私の力のせいで……」

それを聴き、朔夜に水城の横顔を見詰めた。自分と同じ境遇の者の言葉は初めてであった。

「五歳の時だったよ。今でもまだはつきりと覚えてる。夜中、寝室で目が覚めるとお母さんが、辺り一面の火を必死で水の術を使って鎮火してた。だけど、私の方が力が強くて、その行為はただの虚しい行為だった。制御できない自分の力にどうしようもなくて、ただ立ち尽くすだけだったよ。そんな私に、云い残したお母さんの最期の言葉は、『水城の名前は、火に対抗するべく為に付けたの。防波堤の意味も込めて。だけど無意味だったかも知れない……でもねお母さんは心からあなたを愛しているわ』煙り立つ部屋の中で、お母さんは笑って生き絶えたわ」

どんな気持ちだっただろう？ 燃え行く自宅。死に絶えて行く肉親。炎に守られて生き長らえたこの子の心は痛みを感じなかったはずはない。物心付いた瞬間に消え去って行く大切な者に小さな手を伸ばさずにはいられなかったはずだ。でも、それは叶わなかった。

「……」

『分かるよ』と云ったこの水城の言葉は朔夜の気持ちを和らげた。

比較している訳ではない。同情している訳でもない。この子は、それ乗り越えて、自分を見つめる事がこの歳で出来るようになってるのだ。だからこそ、朔夜のギリギリの気持ちを汲む事が出来たのだろう。それを凄いと素直にそう思った。

「ありがとう……」

「何の事？」

水城は、惚けてみせてはいるが。灰かに頬に紅が差していた。照

れるのは柄でもない。とでも云うかのように……

「それより、おじちゃんはやめてもらえるかい？僕はそこまで歳とってないから……朔夜で良いよ」

話をそらす為に、朔夜は言おうと思っていた事を口に出した。

「……じゃあ、朔夜おじちゃん」

一瞬考えるようにして、やはりおじちゃんと水城は念を押した。

「……何故おじちゃんなのかな……？叶はお兄ちゃんなのに……」

少し頬が引きつっている朔夜に、

「だって、叶は精神年齢低そうなんだもん。で、朔夜おじちゃんと、もう一人のおじちゃん……」

「域戸君……」

「城戸おじちゃんって、精神年齢高そうなんだもん！」

シレッと云って退ける。そんな水城に朔夜は、一瞬目を丸くしてからクスリと笑ってしまった。精神年齢ね……この本音を叶が聞いたらどう反応するであろうか？それを確かめるのは恐いので、取り敢えず、

「分かりましたよ。僕の事は朔夜おじちゃん結構ですよ」

納得し、了解したのであった。

次第に夢の空間範囲に辿り着く。短くて長い道のりは、朔夜と水城の距離を縮め、そしてゆっくりと目を醒ました。

「大丈夫なんかい！朔夜！」

まだ覚醒し切れない朔夜の表情を確認しつつ叶は問いかけた。少し青ざめている叶の顔色が印象的で、朔夜は柄じゃないですよと笑いかけた。その言葉にふて腐れる叶ではあったが、憎まれ口をきけるようだったらと安心して一息付く。それより、朔夜は気にかかった。水城の容態である。ゆっくり目を醒ましたその少女は何事もなくシャッキリ起き上がって眠り込んでいる乗客にかけた術を開放した。皆突然目を醒ましはじめる。

朔夜の試みが成功したのか、今迄有った事をすっかり思い出す者

はいなかった。そして何事もなかったように会話を始める人達多数。その姿を見て、水城を除く三人はホッと肩をなで下ろした。

水城と云えば、お腹がすいたのか……自らの座席に座り再びスナック菓子を食べ始めた。朔夜の心配も何の事やら？とにかく無事な姿を見て朔夜は安堵した。

「心配は無用なようですね……」

ボソリと呟く朔夜に、叶は何の事やらと首を捻っていた。でも、何はともあれ解決した事件を思うと取り敢えずゆっくり席に着く。その様予に気付き直紀は、

「那覇空港に着いたら。鹿児島迄この三好浩輔を引っ張って行くので、一時鹿児島に滞在する。先に広島に行ってもらおうか？後を追いかけて、広島西空港で降りるよううにして、後は連絡を入れる」犯人、三好浩輔の席横に座って叶にそう伝えた。

「ああ、そうしてくれや。一つ手柄も増えた事やし、お土産期待しとるで？鹿児島と云えば……何やるなあ？さつまいもか？」

そんなあまりにも知識のなさで自分本位な叶に少し苛ついたのか、
「冷め切ったさつまいもをお土産にしてやろう！」

直紀はふんぞり返るように、座席で脚を組む。それに対し、叶は苦笑いした。

後、十分もすれば、那覇空港に無事到着するであらう。叶は、座席から見える透き通るような音い空を眺めながら心を落ち着かせていた。

12 期待

期待

那覇空港に下り立ち、荷物を取り上げると、広島空港迄のチケットを購入しようと、朔夜と叶は受付に足を運んだ。ここで、直紀とは別れて三人の旅が始まるのだと思っていた矢先、突如聴き慣れた声が聴こえてきた。

「朔夜ちゃん、叶！」

その声の主が三人に向って走り込んで来たのが見える。

「かえで……ちゃん？」

呆気にとられていた叶は、その姿を目を見開いて口が開いたまま立ち尽くしていた。

「だらしないですよ……叶？」

宮古空港迄の道のりに朔夜が意味ありげな事を云って含み笑いしていたのを思い出した。そして、一言、

「こんな嬉しい事ないやん！」

子犬のような表情に変わっていた。その後、かえで目掛けて走り込んだのだが、あっさりと退けるかえでであった。

「お仕事、放棄して来たのですか？」

朔夜はそんな叶の心情を笑いながら見ていたが、かえでは叶を無視し、

「有給とらせてもらったの、せつかくの旅だしあたしも是非参加したかったのよね！ここが沖縄なんだから、これからどうするの？」

そんな会話をしていると、水城がひょっこり顔を覗かせた。

「へえ、かえでお姉ちゃんって云うんだ、私、水城って云うの。これから広島に行くんだって」

「この子は？」

新しくメンバーに加わった事を朔夜は説明する。水城はこのかえ

での足下に纏わりつく。それを喜んでかえでは相手をしていた。

しかし、かえでにお姉ちゃんと『ちゃん』付けする。それを聴いて、これも精神年齢だからだろうか？と朔夜は笑いそうになったが、歳は離れているが女の子同士だしと改めて思い直した。案外気に入られたのかも知れない？すでに、水城はかえでに開放感ある態度で接している。それを可愛いと思ったのか、かえでも嬉しそうだった。そして、

「今着いたばかりなのに……広島？すぐ移動するの？」

「かえでちゃんに着いたばかりですか？それなら少し観光でもしましょうか？」

急がないといけなが、搭乗手続きもまだ先の事である。それを見越して近場でお昼にでもしようかと思いついた叶は、

「そうやなあゝ観光しない手はないよなあゝ」

無視された事がショックだったのか少しでも気を引こうと必死であつた。

「あんたの意見はいらないの！」

あつけらかと跳ね除ける。その態度を悲しいなあと、いじけはじめる叶。それを流石に不憫と感じた朔夜は、

「ははは、かえでちゃんもゆっくりしたいでしょ？お昼にしましょうか」

せつかく来たかえでと、心中を察する叶を思い遣って言葉に出した。

「うん。じゃあ、食べに行こうか！」

上機嫌のかえでを見てホッと息を付く。

「叶お兄ちゃん良かったね」

生意気にも水城は叶のお目当てのかえでの事を察してケタケタ笑っている。全とお見通しな事に叶はポリポリと頭を掻いてみせた。そして、身がかがめて耳元でボソリと呟く。

「子供が大人の世界を笑うんやない！」

その言葉に、不機嫌な水城。素直じゃ無いんだから……と、顔に書

いてあった。

旅は道連れ世は情け……旅の道中は気持ちが良い。何だか異邦人になった気分だ。

そんな時、電撃が叶の身に走った。

「……マサキ」

それは、五行の一人がマサキの手に落ちた事の一本の伝達であった。既に、五行の一人を雅樹が確保した合図である。

しまったと云う気持と、時間の流れに逆らえられないと云う気持ちとが交互に叶の心に溢れそうになる。

そして、雅樹に対抗出来る陰陽師を手に入れる事ができるのかどうか？今はその人物じゃ無かった事も有り、より焦りは募る。

その上それがどの土地なのかまでは見当がつかないが確かに一つの点は消え去った。改めて気を引き締めなければならない。と感じながらも朔夜には敢えて内緒にしておいた。

今は少しでもこの仲間達との出逢いの余韻に浸っていたかったのである。

#12 期待（後書き）

ちよつと次の四ノ巻のUPはお時間掛かりますが、待つて頂けるとありがたいです。書き終つてはいるのですが。。。その前に次は、ちよつとしたファンタジーをUPしていきたいです。その後、占夢者シリーズをば続けますです。またお付き合い頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283d/>

占夢者人の夢 ～参ノ巻～

2010年10月8日15時36分発行